

交さ点の^{やくそく}約束

鹿児島県 宇宿小学校 3年 阿部 恵

あの交さ点に来ると、わたしはいつも周りを見ます。あのおじさん、いるかなって。

「ハア、ハア、ハア。」

あの日、わたしとお母さんは、全そく力で走っていました。水泳教室の時間がせまっていたからです。だいすきな水泳にちこくしたくなくて、ひっしでした。

「すみません。」

交さ点をわたって、プールまでもう少しというところで、足を止めました。向こうから来たおじさんに、声をかけられたからです。

「この道をわたりたいんですが、交さ点はどこですか。」

おじさんが聞いたので、

「もう少しまっすぐ行ったところにありますよ。」

と、お母さんが答えました。

「ありがとうございます。」

お礼を言って、おじさんは歩いていきました。わたしは立ち止まっていた分をとり返そうと、また走り出しました。でもお母さんは、首をぐるっとひねって後ろを見ながら、立ち止まったまま動きません。

「どうしたの。」

わたしは、お母さんの手をぐいと引っばりました。

「さっきの人を、交さ点の向こうまで案内しよう。」

「えっ。」

お母さんの言ったことに、わたしはびっくりしました。そんなことをしたら、水泳にぜったいおくれます。

「あの人、白いつえを持っていたでしょ。目が悪いんだよ。」

今度は、お母さんが私の手を引っばって歩きはじめました。

「向こうにわたるまで、ご案内します。」

おじさんの後ろから、お母さんが声をかけました。

「いいんですか。」

ふり返ったおじさんの顔を見て、私は気がつきました。おじさんの目線が、お母さんともわたしとも合っていないことに。

交さ点をわたっておじさんを見送った後、わたしたちは信号が青になるのを待ちました。

「おくれちゃったね。」

けいたい電話を見ながら言うお母さんに、わたしは、「いいの、いいの」とわらって手を横にふりました。そして、

「あのね。」

信号が変わる直前、わたしはせのびをして、お母さんの耳元で言いました。

「今度こまっている人を見かけたら、わたしが助けるね。」